

序

引き続き社ゼミバブルは続き、今年もゼミ分属で上位指名が多数集まった。社会学（および教員）の魅力というよりは、ゼミの雰囲気がよろしいということらしい。あえて言うなら「爽やか」ってことだろうか？かつてのアルコール臭漂う感じのゼミの雰囲気も個人的には好きだったけど。てなわけで、今年も新たに5名の1年生を迎え、2年生5名、3年生6名、4年生4名、大学院生1名を加えて、総勢21名のゼミとなった。恐れていた教育実習も、なんとか順当にこなせた（神保ちゃんには申し訳ないこって…）し、昨年度の卒業生のうち、2人が公務員になることが決まり、また、本年度卒業予定の4人も、とりあえずはそれぞれに進路を決定している。長らくフリーター生活だった卒業生の就職も決まり、指導教員としては、就職面においてある程度は満足のできる一年でもあった。

ゼミ運営も例年通り、前期は主に文献購読、後期にゼミ誌の作成といった内容である。前期はスーザン・ストレンジの『マッド・マネー カジノ資本主義の現段階』（岩波現代文庫、1999=2009）を読んだ。経済の話はやはり難解だったか、多くのゼミ生は消化不良だったかもしれない。しかし、一市民として、あるいは教員として、経済の知識、特にグローバル化した国際関係下における経済の知識は大切である。これからも、このような側面への関心を持ってもらいたい。後期の文献は村井吉敬の『エビと日本人Ⅱ』（岩波新書、2007）をチョイスした。前期のテキストが、難解すぎた感があったという反省と、グローバル化を知るということを考えたときに、身近な食材がまさにそれを象徴しているという点で、格好の話題を提供してくれると考えたからである。

本年度は、8月4.5日に、胆振方面を訪れた。白老町・苫小牧市を目的地として、千歳や恵庭のビール工場、道の駅や千歳空港にも立ち寄った。たまたま停泊していた護衛艦「あしがら」も見学できたし、間近にある戦闘機にもときめいた（戦争反対だけどね）。振り返ってみれば、そこそこの充実感のある旅だったように思う。白老牛をはじめホッキ丼にホッキラーメン、地ビールもありで、飲食も記憶に残る。サッポロビールのお姉さんの注いだビール、旨かったね。それと、みすずばあちゃんの棒だらのおつまみも美味でした。

個人的には今年も多忙な一年であった。美唄では雪山プロジェクトのリーダーを任せられ、講演の依頼も3件あった。再生可能エネルギーに関しては流行ものという感もあるが、新幹線について初めての依頼があったのは感慨深い。大学院生時代から数えて17年目でついに訪れた、自分の中では「快挙」である。やはり、人から関心を持たれるということは、社会科学に携わる研究者としては勲章物である。

最近、いろいろとゼミでやってみたいと思うことがある。ゼミの運営も、近い将来訪れる経済学ゼミとのゼミ室の共用ということを考えると、もっとバリエーションを増やす必要があるだろう。施設見学（清掃工場とか、北鎮記念館とかね）、DVD鑑賞会（環境関連のまじめなやつ or ジブリ）、農作業、やれるところからやっていこうかね。